

Talmy の類型論から見た日本語と韓国語の様態表現 —複合動詞を中心に—

宣 ミンジョン

要旨

本稿は、Talmy の類型論と関連研究から、日本語と韓国語は同じ V 言語に分類されるが、個別言語の特徴である複合動詞によっては、様態表現に違いが見られることを示した。調査手法として、自発的移動と使役移動を表す英語の様態動詞を、日本語と韓国語ではどのように対訳しているのかを調べた結果以下のことが分かった。まず、自発的移動においては、様態動詞の種類が韓国語と比べて日本語により豊富に見られ、その際、様態は複合動詞で表されることが多かった。このように様態動詞が豊富に見られたことには、韓国語が一般的な様態動詞、日本語が意味拡張の動詞を用いる傾向が影響している。また、使役移動においては、両言語とも様態動詞が豊富に見られた。特に、韓国語では様態への依存度や複合動詞の V1・V2 の両方が様態を表す頻度が高く、様態動詞を豊富にしている。両言語の違いは、物や容器の大きさによる様態動詞の使い分けに見られた。

キーワード： V 言語, 複合動詞, 様態, 様態表現の中立化

1. はじめに

本稿では、Talmy (1991, 2000) の類型論とその多様性を指摘した先行研究 (Koga et al. 2008, Slobin 2005) を日本語と韓国語の複合動詞から再検証することによって、両言語が同じ Verb-Framed Language でも様態 (Manner) の表現には違いがあることを示し、その要因を考察する。

2. 先行研究

2.1 Talmy の類型論

Talmy (1991, 2000) によると、移動事象 (Motion event) を構成する主要イベント (main event) には、移動体 (Figure)、場所 (Ground)、移動または静止概念 (Motion)、経路 (Path) があり、付属イベント (subordinate event) には、様態や原因 (Cause) などがある。この中で経路が移動体と場所の移動関係を示す中核スキーマ (core schema) であり、経路を

主動詞で表す言語を Verb-Framed Language (以下 V 言語)、経路を主動詞以外の統語要素 (Satellite²) で表す言語を Satellite-Framed Language (以下 S 言語) としている。代表的な S 言語には、英語やドイツ語があり、V 言語としてはスペイン語が代表的である ((1) の四角で囲った部分が経路である)。

- (1) a. 英語 (S 言語) : The bottle floated out.
 b. スペイン語 (V 言語) : La botella salió flotando.
 ‘the bottle exited floating’ (Talmy 1991:487, 一部修正)

Talmy (2000) は日本語や韓国語を V 言語に分類している。実際、(1) を日本語と韓国語で表すと、次のように経路が動詞に現れる。

- (2) a. びんが外に浮かんで行った / 流れて行った / 流れだした
 b. pyeng-i pakk-ulo hulle-kassta / hulle-na-wassta / tte-naylye-kassta
 びんが 外に 流れ-行った / 流れ-出-来た / 浮び-下り-行った

(2) のように、日本語と韓国語では、びんの経路を「行く」、「na-ota (出-来る)」、「kata (行く)」の動詞で表していることから、スペイン語と同じ V 言語とされる。

2.2 Talmy の類型論の多様性

Talmy (1991, 2000) の類型論の多様性を指摘した先行研究には Koga et al. (2008) と Slobin (2005) がある。Koga et al. (2008) は、Talmy の類型論が個別言語の特徴も考慮する必要があるとして、例えば、「行く」や「来る」、「ここ」といった直示 (Deixis) の表現は S 言語内でもドイツ語で多く見られ、英語やロシア語では少ないと指摘している。

- (3) a. 日本語 [original] : 服を着て、洗面所に行って…
 b. 英語 : He'd got dressed, go to the bathroom, …
 c. ドイツ語 : Er zog sich an und ging in-s Bad,
 ‘he put himself in and went into the bath’
 d. ロシア語 : Odevaet-sja on, idet v ubornuju umyvaf'-sja.
 ‘dress-himself he walk in toilet wash-himself’
 (Koga et al. 2008:21, 一部修正)

(3) では、日本語の直示動詞「行く」に対し、英語とドイツ語は同じく直示動詞「go」や「ging」で表しているが、直示動詞のない³ロシア語は、様態動詞「idet (walk)」で表

している。英語とドイツ語には直示動詞が存在するが、英語の直示動詞は様態動詞と競合関係にある (go out vs. run out)。一方、ドイツ語には競合関係がない (lief hin-aus ‘run thither-out’)。その結果、ドイツ語、英語、ロシア語の順に直示表現の頻度が高い。

Slobin (2005) は、言語によって様態の際立ち (salience) が異なる理由を Talmy の類型論で説明している。経路を主動詞以外の要素で表す S 言語は、様態を動詞で表しやすい (run in)。一方、経路を動詞で表す V 言語では、様態を表すためにさらなる付加詞 (adjunct) などが要求される (nixnas b’rica ‘enter in a run’)

2.3 問題提起

以上で示した Talmy の類型論と関連研究から、日本語と韓国語は同じ V 言語に分類されるが、個別言語の特徴である複合動詞によっては、両言語が V 言語内の多様性を示す可能性があるということが分かる。経路を動詞で表した (2) は複合動詞であり、様態は前項動詞 (以下 V1) で表れている。V1 は、オノマトペや副詞のような付加詞と違い、主動詞との間に別の形態素が挿入できないほど⁴主動詞と統語的結合度が高い。V1 をオノマトペにすると、以下のように容認度が落ちる。

(2’) a. ??びんが外にぶかぶかと行った。

b. ??pyeng-i pakk-ulo twungtwung kassta.
びん-が 外-に ぶかぶか 行った

(2’) は経路を動詞で表す条件を満たしているにもかかわらず、様態をオノマトペで表したため不自然になっている。(2’) のオノマトペは省略可能で、主動詞との間に別の形態素が挿入できる。一方、複合動詞は、様態の V1 が省略できず、主動詞の V2 との間に形態素の挿入が難しい。このように、複合動詞やオノマトペ、副詞を取り揃えている日本語と韓国語では、実際どの主動詞以外の要素で様態を表すことが多いかを調べる必要がある。

また、Koga et al. (2008) と Slobin (2005) を再検証した結果、V1 によって両言語が同じ V 言語でも様態の表現に違いがある可能性が出てきた。まず、Koga et al. (2008) を韓国語で再検証した結果⁵、日本語と韓国語では直示動詞に違いがなかった。「行く」や「来る」の直示動詞が経路動詞の下位分類の一つである (Talmy 2000) ことを考えると、両言語ともに直示動詞の頻度が高いのも自然な成り行きであると言える。

一方、Slobin (2005) を日本語と韓国語で再検証した結果、両言語の様態動詞に違いが見られた (() は複合動詞の頻度)。

	タイプ頻度	トークン頻度
英語 [original]	28	64
S 言語 (平均)	25.6	62.2
V 言語 (平均)	17.2	52
日本語	26 (23)	46 (40)
韓国語	11 (10)	46 (37)

表 1 Slobin (2005) を含む各言語の様態動詞の頻度⁶

表 1 では、日本語や韓国語が経路を動詞で表す V 言語であるため、様態動詞の頻度は Slobin (2005) の主張通り低い。両言語はトークン頻度もタイプ頻度も V 言語の平均より低い。ただし、複合動詞まで含むと、頻度はだいぶ上がる。日本語のタイプ頻度は 26 あるが、そのうち複合動詞が 23 だった。また、韓国語のタイプ頻度は 11 のうち複合動詞が 10 だった。複合動詞まで含むと、日本語は S 言語の平均を上回るほど高く、韓国語よりも二倍以上多い。このことから、日本語が韓国語と同じ頻度でも、より多くの種類を用いていることがわかる。その際、様態のほとんどが V1 に表れることに注目したい。

以上の検証から、2つの予想が立てられる。Koga et al. (2008) や Slobin (2005) は、物が自ら移動する自発的移動 (spontaneous motion⁷) を対象としているが、①別の小説でも、日本語の様態動詞はタイプ頻度が韓国語より高く、その際、様態のほとんどが V1 に表れる。②自発的移動にさらに参加者が加わる使役移動 (caused motion) でも、同様の結果が予想される。この際にも様態は V1 に表れることが多い。以下の節では、このことを調査し検証を行う。

3. 調査結果

調査は、英語小説の 3 作品 (*The Lost Symbol*, *The Great Gatsby*, *Howl's Moving Castle*) から特定の範囲 (100~199 ページ) を限定して英語の様態動詞⁸とそれに対応する日本語と韓国語の翻訳を対象とした。自発的移動は、物理的移動を表す英語の自動詞構文 642 例、使役移動は他動詞構文 307 例の対応を調べた。翻訳者によっては、様態動詞が使われていない場合もあるため、その場合は様態動詞を使った文の作例を試みた。具体的には、訳文が①経路動詞のみ、②様態が付加詞のみ、③捉え方の違いによる主語の不一致⁹、④漢語述語の場合に作例をし¹⁰、それらも例に加えることで、様態動詞が使われ得る頻度の最大の可能性を探った。

3.1 自発的移動

まず、自発的移動は、予想通り、日本語の様態動詞が韓国語よりタイプ頻度が高かつ

た。調査結果を示すと、以下のようになる（（ ）は複合動詞の頻度）。

		タイプ頻度	トークン頻度	トークン/タイプ
作品①	英語 [original]	45	102	2.3
	日本語	26 (19)	69 (43)	2.7
	韓国語	17 (14)	62 (48)	3.6
作品②	英語 [original]	39	70	1.8
	日本語	21 (16)	57 (46)	2.7
	韓国語	16 (16)	57 (55)	3.6
作品③	英語 [original]	35	74	2.1
	日本語	27 (21)	56 (39)	2.1
	韓国語	15 (13)	45 (36)	3.0

表2 英語の自発的移動を表す日本語と韓国語の様態動詞の頻度

表2は、英語の自発的移動に対し、日本語と韓国語で表す様態動詞の頻度を作品ごとにまとめている。同じトークン頻度の条件でタイプ頻度を比較するため、動詞一つ当たりの頻度（トークン/タイプ）を計算してみたところ、調査対象の全てにおいて日本語が韓国語より低かった。これは、日本語の様態動詞が韓国語と同じ頻度であれば、動詞一つ当たりの頻度が低いことで、他の動詞を用いるようになり、結果的に種類の豊富さにつながる。例えば、足を引きずって歩く「hobble」は、韓国語のほとんどが「kele-kata（歩き-行く）」で表し、様態は「kele-（歩き-）」の一種類だった。一方、日本語は、以下のように複数の様態表現が見られた。

- (4) a. She screwed the paper up and **hobbled** to the door with it [original]. (Jones 2008:191)
 b. それからひねった紙包みを持って戸口へ**引き**返しました。(西村 [訳] 1997:182)
 c. kunye-nun cong-i-lul yemie cweko **celttwuk-kelimye** mwun-ka-lo
 彼女-は 紙-を 整えて にぎり よたよた-しながら 門-端-へ
kele-kassta. (Kim [訳] 2004:131)
 歩き-行った
- (5) a. Sophie creaked to her feet and **hobbled** to the bench [original]. (Jones 2008:106)
 b. ソフィーは骨をきしまして立ちあがり、**よたよた**作業台へむかいました。
 (西村 [訳] 1997:104)
 c. sophi-nun ppikék-kelimye ile-nase cakeptay ccok-ulo
 ソフィー-は ギシギシ-しながら 起き-上がり 作業台 方-へ

celttwukcelttwuk

よたよた

kele-kassta.

歩き-行った

(Kim [訳] 2004:95)

(4) と (5) は「hobble」の様子を日本語と韓国語で表している。韓国語は「celttwukkelimye kelekassta (よたよたしながら歩いていった)」や「celttwukcelttwuk kelekassta (よたよたと歩いていった)」で表し、オノマトペを伴うものの、様態は「kele- (歩き-)」の一種類になっている。一方、日本語は「引き返す」や「よたよた(と) 向かう」で表し、様態は「引き-」やオノマトペの「よたよた」になっている。他にも、「追いつく」、「向かう」、「戻る」が見られた。

(4) と (5) の「kele- (歩き-)」は「hobble」のほか、他の英語の様態動詞に対しても V1 として表れる。一方、日本語の「歩き-」は「kele- (歩き-)」ほど V1 に表れることは多くない (() は頻度)。

(6) a. kele- (歩き-) : walk(13), hobble(9), stride(3), tiptoe(2), trudge(2), hurry(1), maneuver(1),
navigate(1), saturn(1), stump(1)

b. 歩き-/歩いて: walk(8), stride(1), stump(1)

(6) では、「kele- (歩き-)」と「歩き-/歩いて」がどのような英語の様態動詞に対して V1 として表れるのかを示している。「kele- (歩き-)」は多くの英語の様態動詞に対応し、他の動詞を用いないので、種類は豊富にならない。一方、「歩き-/歩いて」は、walk に対応しても、hobble を含め、他の様態動詞にはほとんど対応していない。

また、「kele- (歩き-)」のように、日本語と韓国語の様態動詞には複合動詞の頻度が高い。複合動詞の頻度が最も高い作品②は、韓国語のトークン頻度が 57 のうち 55、タイプ頻度は 16 の全てが複合動詞だった。これらの複合動詞は「様態+経路 (直示)」の組み合わせがほとんどなので、複合動詞の頻度を (様態の) V1 の頻度に見なしてもいいだろう。

以上、自発的移動は、日本語の様態動詞が韓国語よりタイプ頻度が高く、その際、様態動詞は V1 として多く表されることがわかった。

3.2 使役移動

次に、使役移動では、予想とは違い、日本語の様態動詞が韓国語よりタイプ頻度が高くなかった。調査結果は、以下の通りである (() は複合動詞の頻度)。

		タイプ頻度	トークン頻度	トークン/タイプ
作品①	英語 [original]	41	89	2.2
	日本語	33 (20)	82 (45)	2.5
	韓国語	36 (25)	82 (65)	2.3
作品②	英語 [original]	44	76	1.7
	日本語	37 (25)	66 (43)	1.8
	韓国語	40 (31)	73 (49)	1.8
作品③	英語 [original]	15	35	2.3
	日本語	23 (15)	35 (22)	1.5
	韓国語	18 (14)	36 (23)	2.0

表3 英語の使役移動を表す日本語と韓国語の様態動詞の頻度

表3は、英語の使役移動に対し、日本語と韓国語が表す様態動詞を作品ごとに頻度をまとめている。動詞一つ当たりの頻度（トークン/タイプ）は、いずれも、その差は自発的移動ほど大きくない。しかも、英語とも大差ない。このことから、使役移動を表す日本語と韓国語の様態動詞は種類が豊富であることがわかる。例えば、力を加えて物を移動させる様態動詞は、日本語も韓国語も複数の種類が見られる。

- (7) a. Mal'akh wadded up the monogrammed napkin and **stuffed** it into Solomon's mouth. (Brown [original] 2009:126)
 b. (マラークは) モノグラム NAPKIN をまるめてソロモンの口に**押し**こんだ。
 (越前 [訳] 2010:181)
 c. mallakhu-nun naypkhin-ul sollomon-uy ip-sok-ey **sswusye** nehessta. (An [訳] 2009:209)
 マラーク-は NAPKIN-を ソロモン-の 口-中-に ほじくり入れた
- (8) a. He **thrust** the pink-and-white box at Sophie [original]. (Jones 2008:137)
 b. マイケルはピンクと白の箱をソフィーに**つき**だしました。(西村 [訳] 1997:133)
 c. ku-nun pwunhongsayk-kwa huynsayk-uy sangca-lul sophi-eykey nay-**milessta**.
 彼-は ピンク色-と 白色-の 箱-を ソフィー-に 出し-押しした
 (Kim [訳] 2004:121)

(7) と (8) は、英語の「stuff」と「thrust」の様子を日本語と韓国語で表している。物を容器などにぎっしり入れる様態を表す「stuff」は、日本語が「押し-」で表し、韓国語は「sswusye- (ほじくり-)」で表している。物や容器の大きさによっては「突っ (込む)」や「cwie- (握らせ-)」も見られた。また、強い力をすばやく加える「thrust」は、日本語が「突き-」で表し、韓国語は「milita (押す)」で表している。他にも、「押しつける」や

「cwie- (握らせ-)」も見られた。このように、日本語と韓国語には複数の様態動詞があり、物や容器の大きさなどによって使い分けている。日本語の「押し-」は「stuff」と「thrust」の両方に対応するが、韓国語の「milta (押す)」は「thrust」のみ対応している。一方では「cwie- (握らせ-)」が両方に対応するなど、言語によって使い分けに違いがある。

また、使役移動の様態動詞では複合動詞の頻度が高いが、その割合は自発的移動ほどではない。複合動詞の頻度が最も高い作品①でも、韓国語のトークン頻度が 82 のうち 65 (全体の 79%)、タイプ頻度は 36 のうち 25 (全体の 69%) が複合動詞だった。単純動詞の割合が少なくないことに加え、複合動詞のパターンも多様化している。「nay-milta (出し-押す)」のように、様態を V2 で表すパターンもあれば、「押しつける」のように、物を移動させる様態 (正確には手段) を V1 だけでなく、V2 で表すパターンもあった。

以上、使役移動は、日本語の様態動詞が韓国語よりタイプ頻度が高くなかった。また、単純動詞の様態も多く、複合動詞はパターンが多様化し、様態が V1 で表されるとは限らないことがわかった。

4. 考察

以下、様態動詞のタイプ頻度に関わる様態の中立化や削除、追加について考察する。

4.1 複数の様態表現

Sugiyama (2005) は Slobin (2005) を日本語で検証し、英語の様態動詞が日本語に対応される際は中立化 (neutralization) されるとしている。豊富な様態動詞を持つ英語は、日本語では「歩く」や「走る」のような一般的な様態動詞で表すことによって、その他の詳細な様子は省かれるという。例えば、英語の「hobble」を「歩く」や韓国語の「ketta (歩く)」で表すと、足を引きずる様子は省かれる。しかし、実際の韓国語訳では、(4c) や (5c) のように「kele- (歩き-)」のほか、副詞の「celttwukkelimye (よたよたしながら)」やオノマトペの「celttwukcelttwuk (よたよた)」も見られる。これらは様態が複数になっているので、一般的な様態動詞による中立化ではない。このことから、様態の中立化を考察する際は、様態動詞のほか、さらなるオノマトペや副詞があるかどうか調べる必要がある。表 2 と表 3 の中から様態動詞に副詞などが加わる頻度を調べると、以下のようになり、韓国語で多く見られた (() は複合動詞の頻度)。

		作品①	作品②	作品③	計
自発的移動	日本語	7 (3)	11 (7)	8 (5)	26 (15)
	韓国語	12 (10)	19 (18)	3 (3)	34 (31)
使役移動	日本語	0 (0)	3 (0)	1 (1)	4 (1)
	韓国語	4 (2)	4 (2)	0 (0)	8 (4)

表 4 日本語と韓国語の様態表現が複数表れる場合

表 4 は、英語の様態動詞に対し、日本語や韓国語で様態を 2 つ以上の要素で表す頻度を示している。一部を除き、韓国語で多く見られることが分かる。複合動詞の頻度も、韓国語が自発的移動で 2 倍ほど多い。例えば、次のような副詞がさらに加わっている。

- (9) a. “So I **tore** down to Market Chipping today. [original]” (Jones 2008:137)
 b. 「だから今日、<がやがや町>へ**とんで**いったんです」 (西村 [訳] 1997:132)
 c. “kulayse onul **pwulinakhey** makheyschiphing-ulo **tallye-**kassten keyeyyo”
 だから 今日 大急ぎで Market Chipping-に 走り-行った ものです
 (Kim [訳] 2004:120)
- (10) a. At the moment, however, Katherine had a cell phone pressed to her ear while she **was**
dashing blindly along the endless length of carpet [original]. (Brown 2009:179)
 b. だが、いまは携帯電話を耳に押しあてて、果てしなくつづくカーペットの上を
 向こう見ずに**突き**進んだ。 (越前 [訳] 2010:252)
 c. haciman cikum, khayselin-un cenhwaki-lul kwi-ey paccak kacta tayn chay
 しかし 今 キャサリン-は 電話-を 耳-に きつく 持ち-あてたまま
 kkuthepsi iecin khapheys wi-lul **cengsinepsi** **tallye-**kako issessta.
 果てしなく つづく カーペット 上-を 夢中に 走り-行って いた
 (An [訳] 2009:294)

(9) と (10) は、英語の様態動詞を韓国語では V1 に加え、さらに副詞で表している。様態を V1 の「tallye- (走り-)」に加え、副詞の「pwulinakhey (大急ぎで)」や「cengsinepsi (夢中に)」で示し、複数の表現で示している。一方、日本語は、様態を「とんで」や「突き-」で表し、副詞がなくても走る勢いを表している。このように、韓国語は、複数の様態が多く見られるのが分かる。

ここで、韓国語の V1 「tallye- (走り-)」が一般的な様態動詞で、日本語の「とんで」や「突き-」は本来の意味から拡張が見られることに注目したい。「とんで」は<空中に浮かんで移動する>という本来の意味から、空中に浮べない人間にとって移動の速さへ意味が拡張されている。また、「突き-」は<とがった物で一つ所を勢いよく刺す>という本来の意味から、場所を刺すような移動の勢いへと拡張されている。

(4) でも、同様の傾向が見られる。韓国語は一般的な様態動詞「kele- (歩き-)」に副詞を加える一方、日本語は様態を「引き-」で表している。「kele-」は、どの言語にも存在する一般的な様態動詞だが、「引き-」は<物に手をかけて近くへ寄せる>という具体的な意味から、足を持って近くへ寄せる様子へ拡張されている。

このように、韓国語はどの言語にも存在する一般的な様態動詞を用いる。一方、日本語は最も基本的な意味から意味が拡張された動詞を用いている。一般的な様態動詞は、

V 言語や S 言語に関係なくどの言語にも存在するため、日本語訳を一般的な様態動詞に置き換えても容認度は落ちない。一方、意味拡張の動詞は、言語によって拡張の程度や方向に違いがあるため、韓国語では、以下のように全く同じ意味拡張が使えない。

- (4') b. それからひねった紙包みを持って戸口へ **よたよたと歩いて** 行きました。
 (5') b. ソフィーは骨をきしまして立ちあがり、**よたよたと作業台へ歩いて** 行きました。
 (9') b. 「だから今日、<がやがや町>へ **急いで走って** いったんです」
 (10') b. 果てしなくつづくカーペットの上を向こう見ずに **急いで走っていた**。

- (4') c. *kunye-nun congilul yemie cweko mwun-ka-lo **kkule**-tollyessta.
 彼女-は 紙-を 整えて にぎり 門-端-へ 引き-返した
 (5') c. *sophi-nun cakeptay ccok-ulo **celttwukcelttwuk** hyanghayssta
 ソフィー-は 作業台 方-へ よたよた 向かった
 (9') c. *kulayse onul makheyschiphing-ulo **nala**-kassten keyeyyo"
 だから 今日 Market Chipping-に 飛び-行った ものです
 (10') c. *kkuthepsi iecin khapheys wi-lul amhuk sok-eyse **ccille**-naakako issessta.
 果てしなくつづくカーペット上-を 暗闇 中-で 突き-進んで いた

上記の作例は、日本語を一般的な様態動詞に、韓国語を意味拡張の動詞に置き換えたものである。日本語は、一般的な様態動詞に副詞を加えても自然である。しかし、韓国語は、日本語のような意味拡張の動詞だと非文になる。(4'c) と (10'c) は、「引き-」や「突き-」にあたる韓国語の動詞が意味の拡張が進んでいない。(9'c) の「飛び-」は、韓国語でも移動の速さへの意味拡張があり、容認できる。ただし、移動の速さは、以下のように「ttwie- (走り-)」で表す場合が多い。(11) と (12) は、英語の「rush」と「run」の様子を日本語と韓国語で表している。

- (11) a. Katherine **rushed** through the control-room door [original]. (Brown 2009:105)
 b. キャサリンは制御室に **飛び** こんできた。 (越前 [訳] 2010:151)
 c. khayselin-i thongceysil an-ulo **ttwie**-tulessta. (An [訳] 2009:178)
 キャサリン-が 制御室 中-に 走り-入った
 (12) a. “She **ran** out in a road [original].” (Fitzgerald 1925:180)
 b. 「**飛び** 出したんだが、」 (小川 [訳] 2009:228)
 c. “yeca-ka tolo-lo **ttwichye**¹¹-na-kassupnita.” (Kim [訳] 2013:175)
 女-が 道路-に 走り-出-行きました

(11) は、勢いよく走る「rush」を日本語の「飛び-」で表している。(12b) の日本語は、

動詞に置き換えても（(死亡した) 女が道路に飛び出した）容認度は問題ない。いずれも、日本語は移動の速さを「飛び-」で表しているが、韓国語は「ttwie- (走り-)」で表している。「nala- (飛び-)」にすると非文になる。このことから、「nala- (飛び-)」は移動の速さへの意味拡張はあるが、「飛び-」よりは拡張が進んでいないことがわかる。

また、日本語のようなオノマトペのみの様態もやや不自然になる。(5’c) のオノマトペ「celttwukcelttwuk (よたよた (と))」は、V1 に様態「kele- (歩き-)」がないと不自然に感じる。ただし、(4c) のような副詞「celttwukkelimye (よたよたしながら)」と「kata (行く)」にすると、容認度は上がる。

以上、様態表現が複数表れる頻度を調べた結果、自発的移動において韓国語は一般的な様態動詞、日本語は意味拡張の動詞をとる傾向が見られた。日本語と韓国語は同じ V 言語として、S 言語の英語より様態動詞は豊富ではないが、韓国語は一般的な様態動詞に副詞を加える。一方、日本語は意味拡張の様態動詞など、様態を複数で表さないようにして、英語に対応した詳細な様態を表そうとしている。このような日本語動詞の意味拡張は、前節で見た様態動詞のタイプ頻度の高さに影響すると考えられる。

4.2 様態の削除

様態表現の中立化とは、前述したように、一般的な様態動詞によって詳細な様態が省かれることである。それ以外にも、様態を経路動詞で表して様態それ自体が「削除される」場合もある。今回の調査では、使役移動では韓国語よりも日本語がより多く見られた。

		作品①	作品②	作品③	計
自発的移動	日本語	14	6	13	33
	韓国語	15	5	13	33
使役移動	日本語	7	8	3	18
	韓国語	6	1	1	8

表 5 日本語と韓国語の様態動詞が現れない場合

英語の様態動詞に対し、日本語や韓国語が経路動詞を表し、様態の副詞を除いた頻度を表 5 にまとめた。自発的移動では、両言語の違いがあまり見られないが、使役移動では、日本語が韓国語より多い。例えば、次のような使役移動では、英語の様態が削除される。

- (13) a. He **pulled** his phone from his jacket [original]. (Brown 2009:172)
 b. 上着から電話を出し、…。 (越前 [訳] 2010:243)
 c. layngten-un **ellun** cwumeni-eyse cenhwaki-lul **kke-**nayss-ciman,

ラングドン-は 急いで ポケット-から 電話機-を 引き-出した-が
(An [訳] 2009:283)

(13) では英語の様態動詞が日本語には現れていない。日本語では、経路動詞の「出す」で表し、電話を移動させる際の力を入れるという様態は削除されている。「取り出す」のように、様態を新たに入れることもできるが、削除しても容認できる。一方、韓国語は、様態を「ellun (急いで)」と「kke- (引き-¹²)」で表している。「kke- (引き-)」を削除すると非文になる (*cenhwaki-lul nayssta (電話機を出した))。

このような空間位置関係 (conformation¹³) を表す「出す」や「入れる」は、日本語では単独で用いられる一方、韓国語は単独で用いることができない。韓国語では「kkenayta (引き-出す)」や「satulita (買い-入れる)」のように、必ずほかの意味要素を必要としている。このことから、日本語は、空間位置関係を表す使役移動に二つの選択肢が存在し、様態を削除する選択も少なくないが、韓国語は様態を削除する選択がないことがわかる。

「naya (出す)」や「tulita (入れる)」は、自発的移動の「nata (出る)」や「tulita (入る)」と比べてみると、様態への依存度が高い。「nata (出る)」や「tulita (入る)」も単独で用いることができないが、これらは主に直示動詞の「行く」や「来る」を取り込んでいる (naota ‘出-来る’, tulekata ‘入り-行く’)。様態は「行く」や「来る」を取り込んだ後に加わるので (kienaota ‘這い-出-来る’, keletulekata ‘歩き-入り-行く’), 様態だけ取り込むと非文になる場合が多い (*kienata ‘這い-出る’, *keletulita ‘歩き-入る’)。従って、様態を取り込む傾向は強くない。一方、使役移動では「行く」や「来る」があまり現れないので¹⁴、「naya (出す)」や「tulita (入れる)」は様態を取り込んでいる。つまり、様態を取り込む傾向は強い。このような様態への依存度によって、様態は一定の頻度が見られ、表5からわかるように韓国語の様態があまり削除されていない。

以上、英語の様態が削除される頻度を調べた結果、使役移動において日本語の頻度が韓国語よりも高かった。日本語で様態の削除がより多く見られたのは、様態を削除してもよい選択肢が存在し、実際に様態を削除する選択も少なくないからである。削除される様態が多いと、様態の頻度は低くなる。一方、韓国語の使役移動は様態への依存度が高く、様態を削除する選択肢はない。その結果、様態の頻度は低くならず、その種類もあまり減らない。

このような様態の削除は、3.2 の使役移動における両言語のタイプ頻度に差がないことに影響すると考えられる。

4.3 【様態+様態】の複合動詞

日本語と韓国語の使役移動では、英語の様態動詞を複合動詞 V1 と V2 の両方で表す場合がある。今回の調査では、韓国語の頻度が日本語より多かった。

		作品①	作品②	作品③	計
使役移動	日本語	7	6	1	14
	韓国語	9	12	3	24

表 6 日本語と韓国語が [様態+様態] の複合動詞で表す頻度

表 6 は、英語の様態動詞に対し、日本語と韓国語の複合動詞 V1・V2 の両方が様態動詞である頻度をまとめている。例えば、次のような様態の複合動詞が見られる。

(14) a. After using Trish's key card, he **had rammed** a single dime deep into the key-card slot to prevent any other key-card use without first dismantling the entire mechanism [original].

(Brown 2009:187)

b. トリッシュのカードキーを使ったあとで、十セント硬貨をカードスロットの奥へ **押し**こんだので、ほかのカードキーを使うには装置を分解するほかない。

(越前 [訳] 2010:263)

c. ku-nun thulisi-uy khatu yelsoy-lo mwun-ul yen taum, khatu-lul kkocnun
 彼は トリッシュの カードキー-で 門-を 開けた後 カード-を 挟む
 sullos-ey tongcen-ul hana **sswusye paka** nohassta. sisutheym cenchey-lul
 スロット-に コイン-を 一つ ほじくり 打ち おいた. システム 全体-を
 pwunhay-haki cen-ey-nun talun khatu yelsoy-lul mile nehul swu epskey toyn kesita.
 分解-する 前-には 他 カードキー-を 押し入れなくなったものだ

(An [訳] 2009:308)

(14) は、英語の「ram」を日本語や韓国語に訳した例である。日本語は様態を「押し-」で表しているが、韓国語は「sswusye- (ほじくり-)」と「paka- (打ち-)」で表している。「sswusye- (ほじくり-)」と「paka- (打ち-)」は、そのどちらかを削除すると意味の違いが生じる。ここで表される動作は、カードスロットを掘るようにコインをつつく様態だけでもないし、釘を打つように強く当てる様態だけでもない。コインの移動にはスロットの狭さと力強さの様態を両方備えた方が自然さを感じる。韓国語には「sswusye paka (ほじくり-打つ)」や「kkuletangkita (引きずり-引く)」のように、複合動詞 V1・V2 の両方が様態動詞である場合がしばしばある。このような複合動詞は、韓国語の様態動詞を豊富にすると考えられる。

以上、日本語と韓国語が様態を複合動詞 V1・V2 の両方で表す頻度を調べた結果、韓国語の頻度がより高かった。英語による一つの様態の情報を二つの動詞の組み合わせで表し、様態動詞の種類を豊富にしている。この際、移動する被使役者の経路は現れていない。実際は移動するが、明示されないことから、[様態+様態] の複合動詞は使役者側を

重視しているとも言える。4.2 で削除される日本語の様態がより多かったことを考えると、日本語は使役者を明示しなくてもよく、韓国語は使役者の明示化が進んでいる可能性がある。

このような [様態+様態] の複合動詞は、3.2 の使役移動における両言語のタイプ頻度に差がないことに影響を与えていると考えられる。

5. 結論

本稿では、日本語と韓国語が同じ V 言語でも、個別言語の特徴である複合動詞によっては、様態表現に違いが見られることを示した。具体的には、自発的移動を表す日本語は、韓国語より様態動詞が豊富に見られた。その際、様態は複合動詞の V1 で表すことが多い。このように様態動詞が豊富であるのには、韓国語が一般的な様態動詞、日本語が意味拡張の動詞をとる傾向が影響していると考えられる。

また、使役移動では、両言語とも様態動詞が豊富に見られた。これは、韓国語が様態への依存度が高く、複合動詞の V1・V2 の両方が様態動詞である場合も日本語より多いので、様態動詞を豊富にすると考えられる。いずれの様態も、使役者による手段や原因なので、様態の削除の選択肢がない韓国語では、使役者の明示化がより進んでいる可能性がある。今後は、使役移動における様態の使い分けの違いについて、さらにデータを増やしながらより体系的な分析を進めていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、日本大学非常勤講師の古牧久典さんと東京大学大学院総合文化研究科博士課程の奥村晶子さんには、日本語の容認度チェックやネイティブチェックして頂いて大変お世話になった。その他、多くの方々にご助力いただいたことに感謝する。

註

- ¹ 韓国語では「合成用言」の用語が一般的だが、ここでは、便宜上「複合動詞」に統一する。複合動詞の対象は、日本語が連用形とテ形複合動詞、韓国語は V1 と V2 の間に接辞 e/a をとる複合動詞といった広い意味での複合動詞を指す。
- ² satellite の定義は以下の通りである。“the grammatical category of any constituent other than a noun-phrase of prepositional phrase complement that is in a sister relation to the verb root (Talmy 2000: 102)”
- ³ Koga et al. (2008) によると、ロシア語には「行く」や「来る」が接頭語として存在し、単独では用いられないという。例えば、pri-ehal (come-drive) のように、接頭語の「come」は、必ず主動詞 (verb root) をさらに伴わなければならない。この際、主動詞には様態動詞 (drive) し

か表れないので、ロシア語では、移動を表す直示動詞が必ず直示+様態の形態をとる。

- 4 日本語のテ形複合動詞では V1 と V2 の間に「は」や「も」の挿入が一部見られる。
- 5 Koga et al. (2008) の調査対象である『ノルウェイの森 (村上春樹, 1987)』を韓国語の翻訳小説『sangsiluy sitay, 1989』で検証した結果は以下の通りである (P=経路, D=直示, M=様態動詞)。

	単純動詞			複合動詞			
	P	D	M	PD	MD	MP	MPD
日本語 [original]	144	76	36	57	12	24	3
英語	87	82	17	-	-	-	-
ドイツ語	72	92	5	-	-	-	-
ロシア語	67	0	19	0	37	136	0
韓国語	54	67	45	90	24	20	7

この結果は、Koga et al. (2008) の表 1、表 3、表 6 を参考にして作成したものである。なお、英語やドイツ語は複合動詞が存在しないため、「-」に表示している。ロシア語は、接頭語と動詞からなる動詞を、日本語の複合動詞のように 2 つの意味要素として分類した。

- 6 表 1 は Slobin (2005) の表 3 を参考にしている。S 言語の平均は、オランダ語やドイツ語、ロシア語、セルビア・クロアチア語の平均で、V 言語の平均は、フランス語やイタリア語、ポルトガル語、スペイン語、ヘブライ語、トルコ語の平均を示している。
- 7 Talmy (1991, 2000) では、agent の意図によって non-agentive と agentive, self-agentive に分類している。本稿における「自発的移動」は non-agentive、「使役移動」は agentive と見なされるかもしれない (実際、Talmy (2000:57) は関連研究の自発的移動を non-agentive と紹介している)。しかし、本稿では参加者の数を重視し、「自発的移動」と「使役移動」にする。一つの参加者が意図を持つか持たないかは区別していない。spontaneous motion と caused motion の用語は、Choi & Bowerman (1991) から引用している。
- 8 様態とは、移動に伴う手足の動き、速度、手段のように、移動と直接関わる付随的要素 (田中・松本 1997:129) であり、様態が動詞の形態で表されたものが様態動詞である。本稿では、移動と直接関わらない付帯状況や付帯変化も含めて、付属イベント (subordinate event) の全般を様態とする。これは、付属イベントが主要イベントを補助する機能として、主要イベントの内容をさらに詳しく述べたり、それに何かを加えたり、動機づけたりする (高尾 [訳] 2000:356) ことから、移動と直接関わらない付帯状況なども、広い意味では補助機能を果たすと判断したためである。また、経路動詞は、時間の経過による場所の変化を動詞の形態で表されたもの、直示動詞は、経路動詞の中でも、話者の視点が入る「行く」と「来る」を指す。なお、今回の調査は時制・人称などを含む定形動詞 (finite verb) に限る。分詞や不定詞などの非定形動詞 (infinite verb) は含まない。英語の軽動詞 get, let, have も除外している (Let's get out)。経路動詞と様態動詞の判定は、日本語と英語は田中・松本 (1997) と影山 (2001)、韓国語は Chae (1999) を参考にした。

- 9 ③捉え方の違いによる主語の不一致とは、英語の自発的移動に対し、日本語や韓国語で使役移動に翻訳したり（その逆もあり）、話し手の視点を事態の中に位置づけるナル型言語として捉えて翻訳されたりする場合、翻訳小説での主語は、英語の主語と一致しない。作例は、例えば、英語の様態動詞「hobble」が日本語の翻訳において省略された場合、「よたよたと歩く」を入れてみた。作例した（b'）は容認度に問題がないため、調査対象に含めた。
- a. She **hobbled** over to the shelves and scanned the jars [original].
- b. ソフィーは棚の前で、瓶を眺めわたしました。
- b'. ソフィーは棚まで**よたよたと歩き**、瓶を眺めわたしました。
- 10 日本語と韓国語の翻訳に英語の様態動詞に対応する様態動詞が使われなかったため作例を試みた割合は、自発的移動の日本語が全体の約 50%（123 例）、韓国語は 44%（108 例）。使役移動は日本語が約 32%（63 例）、韓国語は 23%（46 例）だった。
- 11 ttwichita は、『標準国語大辞典（표준국어대사전）』によると、ttwita（走る）の誤った表記だという。ttwiche-na-kata（走り-出-行く）は「力強く外へ走って出て行く」と紹介していることから、ttwita（走る）の誤った表記が残っているとする国立国語院の答弁に従い、ttwiche-を ttwie-の変数と見なす。（http://korean.go.kr/09_new/minwon/qna_view.jsp?idx=87245）
- 12 「kkenayta」を一語とする見方もあるが、ここでは『高麗大韓国語大辞典（고려대한국어대사전）』の形態素分析に基づき、複合動詞「kkue-nayta（引き-出す）>kke-nayta」として見なすことにする。
- 13 Talmy（2000）は、経路をさらに、①出発・通過・到着の概念を持つ Vector、②上・内・外のような幾何学的な概念を持つ Conformation、③行く・来るのような Deixis に下位分類している。ここでは、下位分類の一つの Conformation を指す。
- 14 使役移動では、使役者が被使役者と一緒に移動する場合を除き、「行く」があまり見られなかった。「来る」は使役者と被使役者が一緒に移動する場合でも一例も見られなかった。

参考文献

- Choi, S., & Bowerman, M. (1991). Learning to express motion events in English and Korean: The influence of language-specific lexicalization patterns. *Cognition*, 41, 83-122.
- Koga, H., Koloskova, Y., Mizuno, M., & Aoki, Y. (2008). Expression of spatial motion events in English, German, and Russian: With special reference to Japanese. In C. Lamarre, T. Otori, & T. Morita (Eds.), *Typological Studies of the Linguistic Expression of Motion Events, vol. 2: A Contrastive Study of Japanese, French, English, Russian, German and Chinese*. Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo.
- Slobin, D. I. (2004). The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist, & L. Verhoeven (Eds.), *Relating events in narrative, vol. 2: Typological and contextual perspectives*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 219-257.

- Slobin, D. I. (2005). Relating narrative events in translation. In D. Ravid, & H. B. Shyldkrot (Eds.), *Perspectives on language and language development: Essays in honor of Ruth A. Berman*. Dordrecht: Kluwer. 115-129.
- Sugiyama, Y. (2005). Not all verb-framed languages are treated equal: The case of Japanese. *Linguistic Society*, 31, 299-310.
- Talmy, L. (1991). Path to Realization: a Typology of Event Conflation. *Berkeley Linguistic Society*, 17, 480-519.
- Talmy, L. (2000). A typology of event conflation. Reprinted, with permission, From Talmy, L. *Toward a cognitive semantics*. Cambridge, MA: MIT Press. [高尾享幸訳 (2000) 「イベント統合の類型論」. 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 東京: ひつじ書房. 347-451.]
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics*, vol. 2: *Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (2001) . 『日英対照 動詞の意味と構文』 . 東京: 大修館書店.
- 田中茂範・松本曜 (1997) . 『日英語比較選書 6: 空間と移動の表現』 . 東京: 研究社.
- 松本曜 (2003) . 「タルミーによる移動表現の類型をめぐる問題—移動の意味論 I—」 . 『明治学院論叢』 第 695 号. 51-82.
- Chae, H. (1999). 이동동사의 정의와 분류. *현대문법연구* 15 호, 79-100.

例文出典

- Brown, D. (2009). *The Lost Symbol*. New York: Doubleday. [日本語訳. 越前敏弥 (2010) . 로스트・シンボル. 東京: 角川書店] [韓国語訳. 안중설 (2009) . 로스트 심벌. 문학수첩]
- Fitzgerald, F. S. (1925). *The Great Gatsby*. New York: Scribner. [日本語訳. 小川高義 (2009) . グレート・ギャッツビー. 東京: 光文社] [韓国語訳. 김영하 (2013) . 위대한 개츠비. 문학동네]
- Jones, D. W. (1986). *Howl's Moving Castle*. New York: HarperCollins Publishers. [日本語訳. 西村醇子 (1997) . ハウルの動く城. 東京: 徳間書店] [韓国語訳. 김진준 (2004) . 하울의 움직이는 성. 문학수첩 리틀북]

